Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

309

幼児の家庭生活と養育観に関する研究（１）

○林　　幸範・今林　俊一
（文京女子短期大学）（鹿児島大学）

１．目的

我々は、さきに、子どもの家庭生活としつけの関係について報告をしてきた（林・今林：1984,1985,1986,1987,1989など）。その中で、子どもの生活やしつけに関して様々な点がわかってきた。特に、しつけに対する父親の関わりや母親のしつけに対する態度などが明らかにされた。

しかし、これらの研究では、子どもの生活としつけの実態に重視点が置かれていた。そのため、しつけに対する親の意識や養育態度、養育観などの関係についての研究にかけているものがあった。そこで、本研究では、先の研究をもとにしつけと養育観との関係などについて検討を加える。

２．方法

2.1.調査対象者

東京都の３幼稚園の親に実施し、364名の回答があった(年少以下:12名、年少:20名、年中:169名、年長:163名)。

2.2.調査期日

平成２年１月

2.3.調査方法

自作の調査用紙を封筒に入れて、担任教諭から幼児の親に子どもを通して渡してもらい、記入後園へ提出。

2.4.調査材料

調査用紙は、以下の５要素で構成で作成。

①基本属性、②しつけの実態と意識、③産育の意識、④学校観・教育観、⑤養育観

３．結果と考察

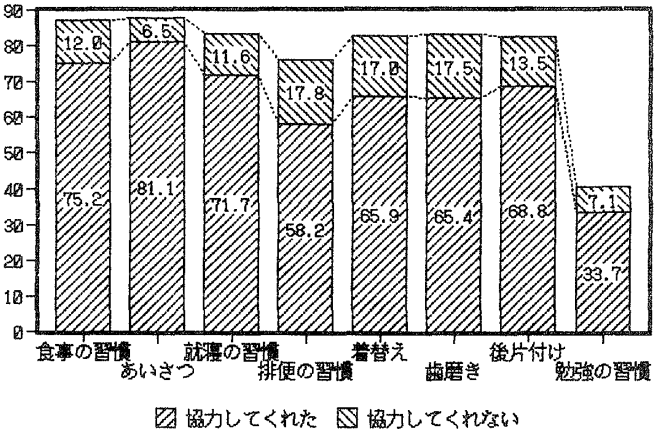
3.1.対象地域の基本的属性

①家族構成：核家族が79.1％、３世代家族が17.3％、その他が2.2％、不明が1.4％であった。子どもの数は、１人っ子が9.3％、２人が62.1％、３人が25.5％、４人以上が3.0％であった。母親の年齢は、20代が11. 4％、30代が79.4％、40代が9.2％で、父親の年齢は、20代が4.2％、30代が68.0％、40代以上が27. 8％であった。　②学歴：母親では、高卒が 44.0％、短大卒が40.4％、大学卒以上が13.7％、中卒が 1.7％であった。父親では、大卒以上が54.6％、高卒が2 8.7％、短大卒が12.0％、中卒が4.5％であった。　③職業：父親の職業は、事務系が38.5％、専門系が17.0％、管理職が11.2％などであった。母親は、専業主婦が78.9％、パート・内職が11.4％などであった。　④まとめ：以上のことから、調査対象地域の平均的な家族構成は、核家族で子どもの数は2.2人であった。母親は、34.0歳の専業主婦で、父親は、35.8歳で、事務系、管理系、専門職に従事している。母親は、高校・短大を卒業し、父親は大学卒以上である。

3.2しつけの実態と意識

①しつけの主体：しつけを担当者しているのは、母親が57.9％、両親が41.6％であった。　②しつけの自信度：しつけに自信があるのは33.0％、自信がない者は24.4％、どちらでもないが42.5％であった。　③しつけの対立：対立しているのが36.3％で、対立していないのが63.7％であった。対立した場合の処理の方法としては、そのままにしておく(31.5％)、特に決まっていない(24.4％)などと消極的解決法が多かった。　④しつけの情報源と相談相手：しつけの情報源としては、配偶者(51.3％)、友人・知人(45.4％)、自分が受けたしつけや経験(22.1％)などが多かった。また、しつけの相談相手は、配偶者(79.0)、友人・知人(45.1％)、自分や配偶者の父母(28.9％)などであった。　⑤しつけの基準：子どもを叱ったり、ほめたりする基準については、人の立場も考えて仲良く暮らすため(62.3％)、子どもの将来を考えて(54.0％)、そうすることが人間として当然だから(39.3％)などの順に割合が高かった。　⑥日常の行動決定：子どもの日常の行動としては、寝る時間・起きる時間(72.3％)、食卓での席(42.6％)、その日に着る服(33.0％)などについて、親が決定をしている割合が高かった。　⑦しつけの期待と状況：次のようなしつけを何歳くらいまでに身につけて欲しいかと聞いた結果は、以下のとおりであった。食事の習慣は３～４歳までにが45.9％、あいさつの習慣は３～４歳までにが38.0％、就寝の習慣は２～３歳までにが52.8％、排便の習慣(トイレット・トレーニング)は２～３歳までにが52.8％、着替えの習慣は３～４歳までにが51.0％、歯磨きの習慣は３～４歳までにが39.4％、後片づけの習慣は３～４歳までにが35.7％、勉強の習慣は６～７歳までにが35.1％と、回答率が一番高かった。また、排便の習慣(94.9％)食事の習慣(92.2％)、着替えの習慣(90.5％)などは、ほぼ身についていると回答している。現在行っているものが多いものとして、後片づけの習慣(37.4％)、挨拶の習慣(37.2％)、就寝の習慣(36.6％)などであった。また、勉強の習慣は、62.4％がまだ行っていないと回答をしている。　⑧しつけに対する満足度：現在のしつけに対して、満足しているのは34.2％、不満であるのが16.3％、どちらでもないのが49.6％であった。　⑨配偶者のしつけへの関心度：配偶者はしつけに対して、とても関心をもっているのが13.7％、関心をもっているのが62.2％、どちらでもないのが19.3％、関心がないのが4.2％、まったく関心がないのが0.6％であった。　⑩配偶者のしつけに対する協力：図表１は、配偶者のしつけに対する協力についての結果である。ほとんどのしつけに対して、配偶者は協力をしている。その中でも、排便の習慣、歯磨の習慣、着替えの習慣などは、協力があまりえられていなかった。　⑪しつけの方法：実際のしつけの場面において、子どもが何かよいことをした時にほめて上げる親は99.7％であり、子どもを叱る時にその理由を話す親は93.3％であり、叱ったり、注意をする時に、「危ない」「だめ」などという言葉を

図表１　配偶者のしつけの協力（％）



NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

よく使う親は80.6％であり、体罰を加えている親は74.2であった。その反面、叱る時によく他の子どもを引合いに出す親は、19.4％と少なかった。　⑫まとめ：以上のことから、しつけは、原則的に母親が担当しているが、両親で担当している家庭も多くなってきている。そのことは、配偶者、夫が、しつけに対して、様々な意味で関わってきていることを意味していよう。そのことは、協力関係にも表れている。しかし、その反面、対立した時に、ほとんどが、何もしないでそのままにしていくことから、しつけに対しての夫婦間コミュニケーションがあまり確立していないのではないかと思われる。ということは、夫の関与の仕方は、妻に請われてという形を取っているのではないかと考えられる。また、しつけ全般に関しては、子どもに対して、コントロール的な傾向も見受けられる。

3.3.産育の意識

①産育観：神や天から授かったと思っているものは42.5％、自然にできたと思っているものは37.4％、計画的につくったものが20.1％であった。　②産育意識：子どもを産み、育てることの意義は、出産・育児によって自分が成長する(74.0％)、家族の結び付きを強める(50.0％)、次の社会をになう世代をつくる(28.5％)、子育ては楽しい(24.6％)、自分の生命を伝える(22.9％)などの順であった。　③まとめ：以上のことから、現代的な産育観である、計画出産が意外と少なかった。産育意識は、一般的には親や家族の側面に意義をもっていると思われる。ということは、産育観と産育意識との間には、ある種のずれが生じていると考えられる。

3.4.学校観

①現在の園に対する要求：現在通っている幼稚園に対しての要求としては、豊かな感情を育てるが60.1％、健全な体をつくるが18.2％、道徳心を養うが12.8％、知識を高め、知識を豊かにするが1.7％などの順に高かった。

②将来の学校に対する要求：将来通う学校に対しての要求としては、豊かな感情を育てるが32.4％、知識を高め、知識を豊かにするが29.6％、道徳心を養うが22.2％、健全な体をつくるが10.0％などの順であった。　③将来の進学：将来、子どもがどこまでの学校に進学して欲しいかを聞いたら、大学以上が74.1％、短大までが11.2％、高等学校までが6.5％、中学校までが0.3％の順であった。　④まとめ：以上のことから、親は、現在通っている幼稚園と、将来通う小学校とは、ある程度、要求の分化を考えているといえるかもしれない。幼稚園では、感情教育をして欲しいと考え、小学校では、知識・道徳・感情教育と、様々な天の教育を要望していると考えられる。ということは、子どもの発達段階を考えて見れば、ある程度当然と考えられよう。しかし、その反面、ほとんどの親が、大学位上までの進学を考えているということは、やはり、知的なレベルが強調されているのではないかと考えられるかもしれない。

3.5.養育観

①養育観：図表２は、養育や家庭に関する様々な意見を聞いた結果である。その結果、各意見に対して、そう思うと回答したのは、次の順であった。「父親も母親とともに育児に参加をすべきである（図表２ではＭ）」、「小さい子にとって母親の影響は、父親の影響よりも大きいと思う（図表２ではＫ）」、「家で何かを決める時は、子どもの意見を十分に聞いて上げる（図表２ではＢ）」、「子どもがやりたいと思うことは、少し危険や困難があってもやらせる（図表２ではＧ）」、「子育て母は親が中心であり、子どものそばにいるべきである（図表２ではＬ）」、「子どもに自由を与え過ぎては、かえって子どものためにならない（図表２ではＤ）」、「『子どもの恥は親の恥』ということわざは、正しい（図表２ではＦ）」、「家の将来のことを考えると、やはり一人は男の子がいた方がよい（図表２ではＡ）」、「祖父母も子育てにかかわる方がよい（図表２ではＪ）」、「親は、子どもの友だちのようになってやるべきである（図表２ではＣ）」、「親が『悪い』と思うことは、子どもがどんなにやりたいと言ってもやらせない（図表２ではＥ）」、「男の子は『男らしく』、女の子は『女らしく』育てるべきだ（図表２ではＨ）」、「小さい時に厳しくしつけておけば、大きくなった時に、強くりっぱな性格の人間になる（図表２ではＩ）」の順に高かった。また、そう思わない方が高い回答率のものは、「小さい時に厳しくしつけておけば、大きくなった時に、強くてりっぱな性格の人間になる」であった。そう思うとそう思わないとの回答率がほぼ同じであったのは、「男の子は『男らしく』、女の子は『女らしく』育てるべきでだ」であった。　②まとめ：以上のことから、親は、育児は原則的に両親で行うものと考えている。その反面、子どもにとって、母親の役割は重要であると考えている。子どもに対しては、子ども本位に考えるようにしたり、友達付き合いをしたりなどを考えているが、ある程度のコントロールも考えているようである。しかし、その反面に、古い養育に対する考え方をもっている親もねずよくいる。ということは、子育てや養育に対して、新しい考え方と、古い考え方が渾然一体としていると考えられる。ある意味で、子育てや養育は、アンビヴァレンツの状態になっていると考えられるかもしれない。

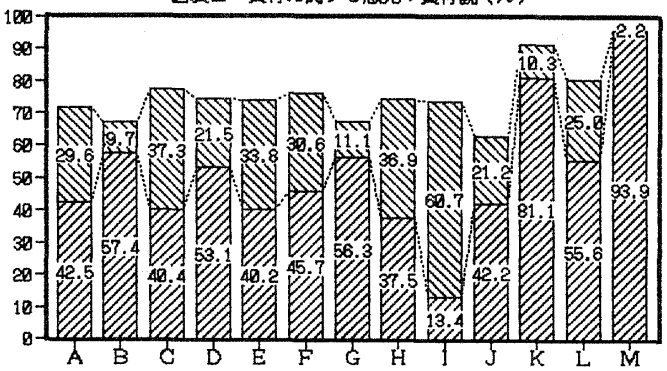
４．まとめ

調査対象地の家族は、全般的には、30代の両親で、子どもは２～３人、高い学歴で、ホワイトカラーの家庭が多い。

しつけに対しては、母親は、父親・夫の参加を意識的にも、行動的にも積極的に肯定している。また、母親の評価ではあるが、父親・夫もかなり高い意識をもち、参加していると言えよう。ということは、新しいしつけ、子育て観をもっていると考えられよう。また、このことは、養育観にも表れていることからもいえよう。

だが、その反面、古い養育観も親達の意識の中にはある。ということは、行動面では、新しい考え方が占めているが、意識の面では、新しい考え方と古い考え方が渾然としていると考えられる。

図表2　養育に関する意見：養育観（％）



NII-Electronic Library Service